

「短く空しい人生の日々を、影のように過ごす人間にとって、幸福とは何かを誰が知ろう。」

コヘレトの言葉 6章12節

『ぼくを探しに』という絵本をご存知でしょうか。

作者はシルヴァスタイン、主人公はパックマンの形、つまり円の8分の1のところが欠けているキャラクターです。この主人公は自分の欠けている部分を気にしていて、その欠けている部分を探す旅に出ます。主人公は、雨の中、雪の中、野を越え、海を渡り、「ぼくはかけらを探してる」と歌を口にしながら、時には花の香りをかぎます。彼の体は欠けていて、あまり速く転がれません。なので立ち止まってはミミズと話をしたり、カブトムシと競争したりします。チョウも彼の体にとまったりします。「こんな楽しいことはない」そう彼は言います。



やがて彼はいろいろなかけらと出会っていきます。しかし小さすぎたり、大きすぎたりして、なかなか見つかりません。ぴったりのかけらを見つけたと思ったら、しっかりくわえていなかったために落としてしまったり、きつくくわえすぎて、バラバラに壊してしまったり……。

旅を続ける彼は、穴に落ちたり壁にぶつかったり、また苦労を重ねながら旅をします。そしてついにぴったりとしたかけらと出会います。はめてみるとしっかりとハマりました。彼は大喜びします。彼は完ぺきな丸になりました。すっかり丸くなった彼は、前よりもずっと速く転がります。ところがそのために立ち止まって花の香りをかぐことも、ミミズと話をすることもなくなりました。もちろんチョウも止まってくれません。歌を歌おうと思っても、口がふさがっているのです、言葉のすべてに濁音がついてうまく歌えません。そこで主人公は、「そういうことだったのか」と気づきます。そしてはめていたかけらをそっとはずし、ゆっくり転がっていきます。それからそっと歌います。「ぼくはかけらを探してる」彼は再び旅を続けていきます。

私にも足りないかけらがあります。私は美術部に所属していますが、これとって上手に絵が描けるわけではありません。自分の納得できる作品を完成させたこともありません。絵の他にも欠点だらけがゆえに、悩むこともたびたびあります。しかしよく考えてみて下さい。人はだれしも自分に足りない何かを追い求めて生きているのかもしれない。完璧になることが人生の目的でしょうか。その足りないかけらを探す努力の過程こそが美しく楽しいものであること。またそこで得る知識や人とのつながりも自分自身にとって大切なのではないかと思います。

この聖書箇所に出てきた内容のように、人生を楽しむカギになるのではないのでしょうか。自分に足りない何かを探す旅、すなわち人生は完全ではない日々の重なりから成っています。でも『完全』ではないからこそ人生を楽しむことができるのかもしれない。この主人公の欠けている部分は、私にとっては大切な友人や学校生活、勉強などが当てはまるのでしょうか。しかし、人間が探し求めているものすべてを手に入れた時、そこにあるのはなんなのでしょうか。幸せでしょうか。幸せだとしても、それは物質的な幸せであっても、心の底から感じる幸せでしょうか。主人公は完全であることが本来の幸せではないと分かり、「じゃあぼくは欠けたままで楽しさを感じることができた……。ならば欠けたままでいよう」と思うのではなく、また旅に出かけるのです。完全を求めて。

私は最初、どうしてまた旅に出るのか、疑問に思っていました、その旅の間の出来事に幸せが詰まっていた、それが楽しいものなのだ彼自身気付いたのでしょう。試行錯誤、チャレンジも大切だと思いますが、その欠けた部分から生まれてくる意識や行動が自分を高めてくれるのではないのでしょうか。

ですからみなさん、欠けてていいのではないのでしょうか。そもそも完全な人間はいるのでしょうか。いないと思います。それなのになぜ、欠けている人間とけんかしたりいがみ合ったりするのでしょうか。欠けている部分が違っただけだと思いますが、それは人それぞれ悪いだとか良いだとかないと思います。私たちは欠けている

からこそ、人間であり、足りない自分を満たそうと努力することこそが美德ではないでしょうか。

みなさんも自分を探しに行きませんか？